

豆と俳句 ③ 豆腐（大豆製品）と俳句

塩田 芳之

豆腐の歴史、文化の概要は、本誌No.78に‘大豆と川柳’と題して述べたので参照して頂ければ幸いである。豆腐は、約2000年前中国で初めて作られ、奈良時代に日本に伝わったとされ、奈良、平安、鎌倉と移るにつれ、僧侶、貴族、武士に普及し、江戸時代には一般庶民にも流通したといわれる。その間に豆腐の加工品、料理法も工夫され、身近なものとなって俳句に詠まれるようになった。ここでは豆腐、豆腐売り（豆腐屋）、新豆腐、冷奴、湯豆腐、凍豆腐に分類して紹介したい（行事としての‘針供養’を詠んだ句も取りあげた）。

豆腐

豆腐を詠みこんだ俳句は非常に多い。「とうふの本」（阿部孤柳・辻重光著 柴田書店刊）には‘豆腐百珍’（1872）に続いて、続編、余録が出版されたと紹介され、その内容が書かれている。その他、多くの料理書に豆腐料理が紹介されており、私達の食卓に豆腐が並ぶことが多く、それだけ俳句の材料が並んでいることになる。

しおた よしゆき 福山市立女子短期大学
名誉教授

色付や豆腐に落て薄紅葉	松尾芭蕉
念仏と豆腐とふとし老の春	各務支考
手拭（てぬぐい）も豆腐も氷る横川（よかわ）哉	与謝蕪村
檜の葉の朝から散るや豆腐桶	小林一茶
わら苞やとうふのけぶる春の雨	同上
豆腐切る黄な包丁や水ぬるむ	其外
豆腐みそ生姜飯や鳴雪忌	黙禅
夕立や豆腐片手に走る人	正岡子規
花に近く豆腐を搾る雫かな	河東碧梧桐
豆腐欲しや銃後の春の夕ぐれに	渡辺水巴
草にも風が出て来た豆腐も冷えただろ	種田山頭火
豆腐さげてしぐれて濡れてもどる	同上
酒も豆腐もみんなうまい	同上
新涼や豆腐驚く唐辛子	前田普羅
しらたきと豆腐と買ひて冬ざるる	久保田万太郎
「冬ざれ：冬の荒れさびた姿（広辞苑）」	
生豆腐いのちの冬をおもへとや	同上
梅咲くや豆腐とんとん賽の目に	川端茅舎
雪かかる豆腐切って貰ふ	橋本夢道
人寄せのおぼろ豆腐の雪解の夜	大野林火
（おぼろ豆腐：絹ごし豆腐より水分が多く柔らかい）	

初買ひの豆腐一丁控へけり 鈴木真佐女
豆腐ありなにより風邪の箸すすむ

石川桂郎

濡れ豆腐焼くや炭火の総紅蓮 (ぐれん)

中村草田男

豆腐得て田楽となすにためらふな

石田波郷

湯ざめして居り黙々と豆腐切る 桂 信子
郭公鳴き豆腐は水にふかくしずむ

木下夕爾

椀中に豆腐崩れる冬景色 和田梧郎

蒟蒻も豆腐もこぼる小鉢かな 窪田桂堂

梅咲いてもめん豆腐を好む夫 駒木根淳子

新涼の豆腐を崩す木のスプーン 浜田伸子

重陽の膳なる豆腐づくしかな 藤木美和子

〈重陽：陰曆九月九日の節句〉

新豆腐 (秋)

秋、収穫されたばかりの大豆で作った豆腐のこと。新米、新酒、新蕎麦などと同じく新鮮な味覚を感じさせるが現在は大豆の大部分を輸入に頼っているので国産の新大豆を使った新豆腐は少なくなった。

新豆腐少しかたきも遺恨なる 与謝蕪村

新豆腐添へたる夕餉や秋祭 餘 生

庖厨に事あり新豆腐来る 高浜虚子

火にかけて水鳴る鍋や新豆腐 原 月舟

僧堂の飯 (いい) の白さよ新豆腐

水原秋桜子

そのかみの恋女房や新豆腐 日野草城

高原の戸に物売や新豆腐 星野立子

はからずも雨の蘇州の新豆腐 加藤楸邨

八丁堀より配達の新豆腐 鈴木真砂女

したしさの仏に供へ新豆腐 森 澄雄
新豆腐といふふれこみに買はさるる

上村占魚

雨の日の夕餉早めに新豆腐 古賀まり子

ゆらゆらと母の齢や新豆腐 :

新豆腐よき水を生む山ばかり 藤田湘子

竹の匙添へて山家の新豆腐 井桁衣子

水音の包める宿や新豆腐 山田弘子

大きめの会津汁椀新豆腐 斉藤 仁

万屋 (よろずや) のよろづの中の新豆腐

岡島礁雨

新豆腐若狭は水を誇りけり 森田 峠

眠るたび死の近くなり新豆腐 福島 勲

新豆腐手桶に放つ山家かな 岡田日郎

やや高く新豆腐笛ひびきたる 佐川広治

洛北の杉山に雨新豆腐 角川春樹

忌に寄りて兄弟減りぬ新豆腐 富岡掬池路

灯のうつる桶に水張り新豆腐 宮井港青

菌に応ふ白川ぶりの新豆腐 和田祥子

子地獄もときにたのしく新豆腐 新井友嘯

ほやほやを槽に泳がせ新豆腐 市川稲舟

新豆腐倉の壁より白きかな 杉山飛雨

新豆腐固まりかけてあるところ 長谷川權

新豆腐乗ったる板の雫かな 石田勝彦

角固き方四角形新豆腐 宇田喜代子

ゆきあうて夫が故郷の新豆腐 中村祐子

背伸びする生活は嫌ひ新豆腐 大口公恵

新豆腐くずす吉野の杉の箸 花谷和子

新豆腐切るや清しき角生まる 上村勝子

新豆腐ゆらりと水になじみけり 隅山寛子

新豆腐丸ごと一丁供へけり 上久保忠彦

膳の上初めて涼し新豆腐 数藤五城

深吉野の水をくぐりし新豆腐 幣守玉江

話し声ふと途絶へたる新豆腐 花森こま
 新豆腐自慢の水に放たれし 武田由紀子
 産地の名気負ってをりし新豆腐
 良田美世子
 まむかひに仏塔のある新豆腐 井上弘美
 水底に角の整ふ新豆腐 戸倉完二
 ほの温かき旨さあり新豆腐 池川蝸谷
 旅に出て妻も友がら新豆腐 市村究一郎
 いつとなき齒の衰へや新豆腐 徳永夏川女
 新妻や手の平で切る新豆腐 小沢初美
 ひとおよぎさせて掬へり新豆腐 八染愛子

豆腐売り(豆腐屋)

茶の花や裏門へ出る豆腐売り 蕪村
 おそ起や蚊屋から呼ばる豆腐売り 一茶
 蟬鳴くや行水時の豆腐売り 正岡子規
 卯の花をこぼさずはいれ豆腐売 ：
 細き手の卯の花ごしや豆腐売 夏目漱石
 寄りくるや豆腐の槽に奈良の鹿 ：
 初花を見つつ来にけり豆腐売り 松瀬青々
 呼び込んで豆腐買ひ居る冬の雨 篠原雲亭
 八百屋去り豆腐屋来る背戸の雪
 河東碧梧桐
 豆腐屋の笛で夕餉にする 種田山頭火
 豆腐屋さんがかちあった寒い四つ角 ：
 夕ざれば豆腐屋の笛もなつかしく ：
 落葉ふんで豆腐やさんがきたのでとうふを
 ：
 三日月、おとうふ買うてもどる ：
 青田風ふく、さげてもどるは豆腐と酒 ：
 酒も豆腐もみんなうまい ：
 豆腐屋の笛に長鳴き犬の春 西東三鬼
 暮れ残る豆腐屋の笛冴え々と 中村草田男

豆腐ゆらゆら買ひ去る軀夏の月 ：
 雪かかる豆腐切って貰ふ 橋本夢道
 豆腐屋の来る隔日の七日かな 石川桂郎
 豆腐屋の荷に抽斗がありて春 加倉井秋を
 雫も小走りあかぎれの子の豆腐買ひ
 能村登四郎
 豆腐屋に春の薄暮が迫る坂 渡辺白泉
 店日除豆腐が水にあまた浮き 高木晴子
 豆腐屋の笛もて建国の日の暮る
 岡崎光魚
 水ぬるむ豆腐屋の子がひと走り 細川加賀
 銅貨ばかりの重み豆腐屋冬桜 友岡子郷
 (昭和37~38年頃豆腐の値段は20~25円、
 10円銅貨で重い)

冷奴(夏)

冷やした豆腐に、生姜、紫蘇、葱、花鰹、
 海苔などを薬味として添え、醤油をかけて
 食べる。「冷奴」の由来は、武家の下僕(やっ
 こ)が使う紋が四角だったから、という説
 や、冷たいことを「ひやっこい」と言うか
 ら、という説がある。
 波立てて持ち来る鉢や冷奴 内藤鳴雪
 冷奴水を自慢に出されたり 野村喜舟
 齒を抜きし口もとあやし冷奴 青木月斗
 したしきははだかてたべるヤッコ
 種田山頭火
 寝てしまふ子の頼りなし冷奴
 長谷川かな女
 北嵯峨の水美しき冷奴 鈴鹿野風呂
 もち古りし夫婦の箸や冷奴 久保田万太郎
 何ごともひとりに如かず冷奴 ：
 鱻焼けてくるのを待つや冷奴 ：

繰返す惣菜帖や冷奴	大場白水郎	嵯峨なれや喉ごしのよき冷奴	秦野淑恵
冷奴故郷の月はとく昇り	中村汀女	恋に恋せし昔なつかし冷奴	天川悦子
冷奴庭の茂りは手に負へず	:	父はもう母を叱らず冷奴	栗坪和子
宵月の光はばかり冷奴	:	冷奴に乗りて踊るや削り節	中沢清明
男同志すぐに打ち解け冷奴	大久保澄青	半丁を余す暮しの冷奴	中村久美子
兄弟の夕餉短し冷奴	加藤楸邨	冷奴無病息災とも言えず	水原春郎
ギヤマンにくづれやすきよ冷奴	武原はん	甲子園今日決戦の冷奴	松沢龍一
冷奴いつも通りにいつもの客	鈴木真砂女	冷奴今日も一日終りけり	室岡公子
冷奴藍の器に叶ひけり	:	冷奴かかる別離もありぬべし	中沢高志
何事も半端は嫌ひ冷奴	:	父の座といふものすたれ冷奴	安養寺美人
忽ちに雑言飛ぶや冷奴	相馬遷子	形勢を見ていて崩す冷奴	玉石宗夫
冷奴布目ばかりの患者食	石川桂郎	冷奴もつれ話を箸で割り	佐々木賞山
冷奴隣に灯し先んじて	石田波郷	冷奴つくづく家のこと知らず	馬渡 鼎
池にひびく雨となりけり冷奴	村越化石	冷奴一丁にして皿小さく	増田信雄
ホークもて刺す天刑の冷奴	磯貝碧蹄館	学食の人気メニューや冷奴	和田かおり
夕空の拡がりきりし冷奴	広瀬直人	幸せはたった半丁冷奴	辻中悦子
昼間見し田のひしひしと冷奴	:	晩酌といふ至福あり冷奴	立山藤男
天へ天へ杉は背伸ばす冷奴	鍵和田柚子	五十年波風たたず冷奴	永野はる
山中や朝しらたまの冷豆腐	上田五千石	名水滲む杉香の箸や冷奴	足立愛三
冷奴滅死奉公なんて嘘	中島鳥巢	わが妻の魔女がすぐ出る冷奴	藤島 務
冷奴はや硝子皿のみ残る	徳永山冬子	いぶし銀のような仲なり冷奴	梨本怜子
薬味盛りもう出すばかり冷奴	赤司広榮	柔肌のいま崩れんと冷奴	荻久保八重子
大鉢や井然として冷奴	相馬虚空	河童自在炊煙自在冷奴	村上兆平
品書の筆頭にあり冷奴	小泉みよ	すぐ昼となるや老いたり冷奴	加藤燕雨
冷奴上の子箸を使ひけり	平野弘子	いのちとてわがものならず冷奴	山崎冬華
愛憎の二字われを噛み冷奴	加来ふさえ	冷奴いの一番の客であり	角川春樹
胸よぎる不安の影や冷奴	老川敏彦	女には女の話冷奴	筒野孝行
冷奴庶民感情すぐ妬む	小川軽舟	だんだんにただならぬ世ぞ冷奴	五十嵐修
隠れ蓑変へては崩す冷奴	斉藤幽谷	冷奴さうなるまでに何故言はぬ	
無頼なる鬼才いま黄泉冷奴	馬場駿吉		梶山千鶴子
ひとくちの滋養酒の酔冷奴	松本可南	紫蘇生姜のせて冷え増す冷奴	土生重次
わが性のまだ角とれず冷奴	澤田緑生	夕空の拡がりきりし冷奴	黛 執
遠来の友にワインと冷奴	中村恵美子	湯上りの歯の美しき冷奴	近藤きくえ

打てばひびく声ほしき夜冷奴 伊藤美紗子
 冷奴寡黙に馴れし共白髪 村上真佐子
 藍匂ふテーブルクロス冷奴 一条悠子
 癌癒えてよりの歲月冷奴 添野かよ
 冷奴離れて坐る保身かな 金子かをり
 日本語がとっても上手冷奴 梅本初子
 冷奴雨露しのぐ家でよし 渡辺虹雨
 真四角のむかしかたぎの冷奴 中西信子
 冷奴食べ余生とはこんなもの 山田達男
 旅終へて普段の暮らし冷奴 岩崎健一
 冷奴回りの早き昼の酒 川久保野人
 冷奴米寿の父の予定表 尾高沙羅
 無愛想がよくて行きます冷奴 古川塔子

湯豆腐 (冬)

土鍋に昆布を敷き、だしを取り、豆腐をさっと煮て、鰹節、刻み葱、生姜、海苔、唐辛子、柚子などを薬味にして醤油をつけて食べる。味が淡泊で夏の冷奴と並ぶ典型的な冬の豆腐料理。

湯豆腐に生姜の匂ふ冬至かな 八重桜
 湯豆腐の一つ崩れずをはりまで 蘆 雁
 湯豆腐に霞飛び込む床几哉 夏目漱石
 行秋や湯豆腐さめし朝あらし 松瀬青々
 湯豆腐の鍋下されて冷えてあり 篠原温亭
 湯豆腐や雪になりつつ宵の雨 松根東洋城
 三ヶ日昨日と過ぎて湯豆腐す 小沢碧童
 湯豆腐や走らして買ふ葱少し 渡辺水巴
 湯豆腐や蝦夷の板昆布跳上がり :
 かうして生きてゐる湯豆腐ふいた
 種田山頭火
 ひとりで食べる湯豆腐うごく :

湯豆腐や軒まで充つる夜の霽
 長谷川かな女
 湯豆腐やいのちのはてのうすあかり
 久保田万太郎
 湯豆腐や持葉の酒の一二杯 :
 湯豆腐やまたあく雪の腰障子 :
 混沌として湯豆腐も終りけり 佐々木有風
 湯豆腐や姿見せねど行きとどき 中村汀女
 湯豆腐や帰すに言葉足らざりし :
 大寒の六十妻よ湯豆腐よし 橋本夢道
 塔頭の門湯豆腐の客の門 百合山羽公
 湯豆腐に塔頭の酒や、辛し :
 湯豆腐に咲いて萎れぬ花かつお 石塚友二
 湯豆腐や男の歎ききくことも 鈴木真砂女
 湯豆腐や思へばこそその口叱言 :
 湯豆腐に眼鏡曇らせ禍福なし :
 湯豆腐やつやゝゝ光る女の手 村山古郷
 湯豆腐のまづ箸にして葱甘し 石川桂郎
 四十近し湯豆腐鍋にをどらせて 桂 信子
 湯豆腐や若狭へ抜ける京の雨 角川春樹
 哲学の道に迷うて湯豆腐屋 中里三句
 湯豆腐にうつくしき火の回りけり
 萩原麦秋
 湯豆腐や木と紙の家に住みてこそ 滝春一
 湯豆腐や古き畳に猪口を置き 石丸水子
 湯豆腐やはぐらかされて話やみ 西村和子
 湯豆腐や幸せに居て気付かざる 関森勝夫
 湯豆腐や敷きて分厚き利尻昆布 三戸杜秋
 湯豆腐や花鳥合ひたる大襖 山口明子
 永らへて湯豆腐とはよくつき合へり
 清水基吉
 さりげなき話湯豆腐煮ゆるまで 山本一步

湯豆腐の踊りはじめを先づ掬ひ

佐々木由紀子

湯豆腐やゆくあてのなき夫の顔 佐藤千都

凍豆腐（冬）

寒中、豆腐を適当な厚さに切って野外に置き、夜間は凍らせ昼間は溶かす。これを繰り返して水分を抜く、これを簀子に並べ藁で編んだもので軒端に吊るしたりして乾燥させる。

凍豆腐に空頬もしき北斗かな 静 雲
今宵はもよろしき凍や豆腐吊る 高浜虚子
凍豆腐故郷の山河まなうらに

阿部みどり女

凍豆腐煮て佳き酒を尽しけり 水原秋桜子
天井に吊るし楽しみしみ豆腐 星野立子
田の畦の凍豆腐に月させり 加藤楸邨
雪すこしかかりて暁の凍豆腐 細見綾子
杉山に月のぼるなり凍豆腐 岡井省二
比叡よく晴れ熱湯へ凍豆腐 鈴木鷹夫
戸隠（とがくし）の天へつらなる凍豆腐

佐川広治

いささかの酒のみのこす凍豆腐 角川春樹
凍豆腐湖国の風にさらしけり 縣 展子
引明けや氷豆腐をたたく音 徳永夏川女
凍豆腐今宵は月に雲多し 松藤夏山
峡深く住むやすけさよ凍豆腐 鈴木 元
凍豆腐の影を障子に姑の座 村上一葉子
年玉に一聯提げし凍豆腐 滝 春一

凍豆腐山川（さんせん）の日を吸ひつくす
：

山国の星青く澄む凍み豆腐 小倉英雄
天竜のひびける闇間の凍豆腐 木村蕪城

かすかなる藁のにほひの凍豆腐 山口歌子
岳からの風に反りをり凍豆腐 佐々木茂子
単色の北の冥（くら）さを凍豆腐

林 可折

凍豆腐月の猪垣（ししかき）遠巻きに

大竹きみ江

生凍豆腐（なまごおり）叩く訝（こだま）
や寒未明 小佐田哲男

凍豆腐千早の月にさらしけり 山下秀子
秩父宿一夜で豆腐凍みわたり 三井穂風

凍豆腐作る駒ヶ岳あふぎつつ 春日光堂
寒中の水深く張り凍豆腐 日野たんぽぽ

星夜毎傷つきあへり凍豆腐 倉石永夫
豆腐氷らす屋根に鬼来て争へり 清原拐童

雪重く浅間座れり凍豆腐 堀口星眠
かやぶきの軒に吊られし寒豆腐 荒川作郎

吊るされてきりきりしまる凍豆腐

五味利恵子

鳶の数ふえている空凍豆腐 松本秀一
凍豆腐編みたる藁の青さかな 館岡幸子

安達太郎（あだたら）の風に吹かるる凍豆腐
松本正一

凍豆腐吊るして深き廂（ひさし）かな

新村寒花

荒星のこぼるる軒の凍豆腐 山田弘子
豆腐凍らせて鳥声くつつと 吉本伊智朗

ダム底にかけて恋あり凍豆腐 庄野千尋

針供養（冬、新春）

針を使うのを慎む日、関東では二月八日、
関西、九州では十二月八日に行う。一年中
使った針を淡島神社へ納めに行き、神前で
豆腐や蒟蒻に刺して供養する。針を祀るこ

とによって裁縫の上達も祈る。

山里や男も遊ぶ針供養 村上鬼城

町娘笑みかはし行く針供養 高浜虚子

色さめし針山並ぶ供養かな :

古妻や針の供養の子沢山 飯田蛇笏

針山も紅絹うつろへる供養かな 芝不器男

糸竹のいとまのお針針供養 富安風生

まち針の頭の瑠璃も供養かな 野村喜舟

艶といふ冷たきひかり針供養 長谷川双魚

片づけて子とあそびけり針供養

今井つる女

蹇（あしなえ）の妻の晴着や針供養

日野草城

いつしかに失せてゆく針の供養かな

松本たかし

針供養子が子をつれて来てゐたる

安住 敦

海荒れて淋しきかなや針供養 細見綾子

針供養女の齡くるぶしに 石川桂郎

ふるさとに帰りて会へり針供養 村山古郷

浅草の日のさびれぬし針供養 大牧 広

針まつり玉串捧ぐ黄八丈 尾崎たか

待針のお花畑よ針納 中村桂子

来し方もいまもさびしく針供養 戸田銀汀

こぼれぬし針おそろしや針供養 岸風三樓

針供養女人は祈ること多し 上野 泰

針供養少なくなりし針仕事 永井きよの

供養針どれも女人が損じたる 品川鈴子

針供養うす紅いろの夕べかな 村田 修

ふところの納め行く針誰も知らず 北代汀

舟仕立て島の祠に針納め 佐藤一千

(多数の句を割愛した)